

未災者の参画による災害デジタルアーカイブの構築

～1938 阪神大水害および 1995 阪神・淡路大震災を事例として～

減災復興政策研究科 減災復興政策専攻

©D2 おりはし ゆう き うらかわ ごう
折橋 祐希、准教授 浦川 豪

キーワード

教訓、災害デジタルアーカイブ、クラウドGIS、阪神・淡路大震災、阪神大水害

研究概要

過去の災害や我々が経験した事象に目を向け、そこから教訓を引き出し、社会的な記憶として保存・継承することは非常に重要なことである。しかし残されている資料の多くはアナログ媒体であり、個人の所有、記憶で留まるものも多数ある。また当時の被災体験者は年々減少している。このような背景から、本取り組みでは兵庫県下で過去に発生した **1938 年の阪神大水害と 1995 年の阪神・淡路大震災に注目し、過去の災害に関する写真等紙媒体の情報と被災者の記憶に基づいて、災害デジタルアーカイブを構築した。**また、**デジタルデータの作成は未災者(災害を経験していない人、被災の一步手前にいる人々)も参画した。**その作成プロセスを通じて、**経験者や伝承者との口述のコミュニケーションやフィールドワークを実施するなどの防災教育効果をもたらすことも目指した。**

アピールポイント

【未災者が自分たちの住むまちを知り、災害を知ること】

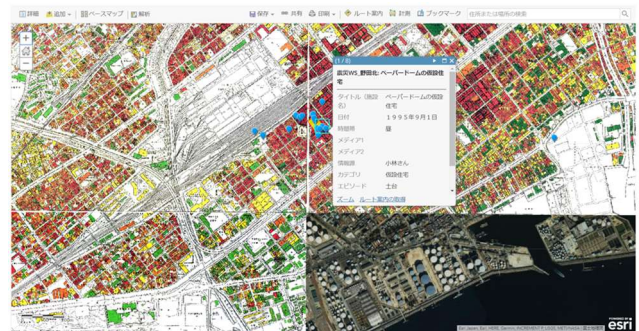
デジタルデータの作成には、未災者として地域の中学生・高校生・大学生が参加した。被災体験者が当時の様子を語る映像や記録を閲覧し、それに基づき過去の写真に写る地点を特定するまちあるきを行った。簡易に情報を登録できるアプリケーションを開発し、まちあるきを行いながらスマートフォンからデジタルデータを作成した。特定の際には災害を知る地域住民の指導を受け、災害にまつわるエピソードや過去の山の稜線と現在の山の稜線を照合する手法等共有頂きながら、現在のまちを形成した社会的な背景や地理的な背景を共に学ぶことも大きな目的とした。

【「その時、そこで何ががあったか」を共有する災害デジタルアーカイブ】

浸水深や震央など被害にまつわる記録やアナログで残る当時の写真、そして被災者の記憶はGIS(地理空間情報システム)を活用しながらデジタルデータとしていった。「その時、そこで何ががあったか」を共有し、今まで語られなかったかもしれない災害の姿を俯瞰的に見られるようなコンテンツを目指した。



まちあるきの様子



作成した災害デジタルアーカイブ